ISSN-2189-3357

高田短期大学 介護・福祉研究

第 4 号

藤　重　育　子

高田短期大学介護福祉研究センター

平成 30 年 3 月

研究論文

医療事務養成校の学生による「手話」の捉え方と学習の意識に関する研究

藤　重　育　子

１．目　的

本研究では、医療事務や医療秘書を養成する専門学校における、必修科目「手話」に関する学生の意識と学習に対する姿勢について、質問紙調査により実態把握をするとともに、今後の授業計画の手がかりを得るものとする。「手話」に関しての先行研究は多岐にわたっており、言語としての手話そのものを取り上げている研究から、ろう文化の中で使用している手話の研究にいたるまで様々であった。本研究において取り扱う言語としての手話に着目している研究の中でも、ろう者や聴覚障害者または手話通訳者が扱う日本手話と、健聴者が捉えている言語としての日本語対応手話の研究に分かれていた。前者の研究としては、聾学校において聴覚障害のある子どもに書記日本語を教授するために、日本手話を活用した作文指導の実践報告（2017，増谷ら）や、また阿部（2010）の研究では、医療現場における手話通訳の必要性を示していた。後者の研究として多く用いられていたものは、その多くが高等教育機関において手話が扱われている内容であった。山本（2011）が、新設学部における手話の科目開講に関する学生の捉え方についてまとめている。また亀井（2014）は、大学内において手話を言語として学ぶことに関心を寄せている学生の意識について検証されており、その後、希望学生に対応した手話の科目開講などがまとめられている。さらに村瀬ら（2016）においても同様に、健聴大学生の手話や聴覚障害に関する知識の必要性を論じている。いずれにおいても学生への学習の機会提供、教養や福祉に対する学生の関心等について質問紙調査により検討されていた。そこで本稿では、既に必修科目として位置づけられている手話の科目に関して､学生の学習意欲をはかるとともに、手話や聴覚障害に対する捉え方を把握した上で、卒業後の職業を意識した今後の授業構成のあり方を検討したい。

さらに「手話」と聞くと日常的に、一般的な言語や語彙という捉え方よりも聴覚障害者の言語や援助手法として扱われることが多い。そのため、思いやりや慈善的行動の尺度から数値化して捉えた上で指導へ働きかけることができるのではないかとも考えられた。伊東ら（2008）は、大学生のボランティア活動に対する関心や参加意識について、性別ではそれらが男性よりも女性の方が有意に高く、学年間では１・２年生と３・４年生との比較によると学年があがるにつれて関心や意欲が高い傾向にあったことを明らかにしている。井出ら（2015）の研究においても向社会的行動尺度は、男性よりも女性の方が高い傾向にあることと、学年間では１～３年生は差がなかったが４年が一番高く、学年があがり向社会

性が高まったことを示していた。本報告の対象学生は全員女性であり卒業学年での受講であるため、より高い値の結果が得られるのではないかとも考えられた。また、谷田(2015)が、大学生の地域社会への責任感尺度を作成するために、共感性尺度や向社会的行動尺度、責任感尺度得点などとの関連性を見たところ、他者との共有体験が多いほど責任感が強い傾向を示し、問題を他者と共に感じ、何かを与えあい、成果を分かちあって喜びあい感謝しあう直接的経験が多いほど地域社会への責任感が強いことが示唆されていた。このような体験からくる経験値が人と関わる人材を育てていくために重要であることが理解できた。将来的に医療現場において事務的補助に就く学生が多いことから医療的な技術面だけではないボランティア精神や行動で示す指導に結び付けていきたいと考えている。

２．手話や手話学習に対する受講者の意識

（１）方　法

調査対象者は、医療事務や医療秘書を養成する専門学校生 33 名（女性）で、全員必修科目「手話」の受講生である。手続きとして、学習の 10 回目にあたる 2017 年 6 月の授業内において、学生の手話に関する意識調査と実態把握、今後の授業計画の手がかりを得る目的であることを説明し、質問調査用紙を配布した。なお質問紙調査は無記名であり、集計したデータが個人を特定しないことや成績に影響を及ぼさないことなどの配慮事項を伝え、了解を得た上で 33 名全員からデータの回収をした。質問紙調査内容は、⑴今までに手話を見たことがあるか、⑵聴覚障害者と話したことがあるか、⑶「手話」の勉強をしてよかったと思うことはあるか、⑷「手話」に魅力を感じるか、⑸「手話」の学習が好きか、⑹「手話」の授業に取り組む姿勢や態度、⑺「手話」の勉強をして分かったこと、⑻「聴覚障害者の生活」について分かったこと、⑼知っている手話の中で一番印象に残っている手話、⑽これまでの授業項目についての評価の 10 項目についての回答を求めた。なお質問項目⑸⑹⑽は 5 件法で行い、⑶⑷は「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の 3 件法で、⑴⑵⑺⑻は「はい」「いいえ」の 2 件法で行った。

（２）結果と考察

各質問項目の回答については以下の通りである。⑴今までに手話を見たことがあるかどうかの問については、見たことがあると回答した学生 29 名、見たことがないと回答した学生 4 名であった。手話を見たことがある学生の回答では電車やバス等の公共交通機関内やテレビや映画等が挙げられていた。最近は、メディアで取り上げられることも多く、目にする機会も増えているのであろう。⑵聴覚障害者と関わった話したことがあるかどうかの問については、話したことがあると回答した学生 8 名、話したことがないと回答した学生 25 名であった。話したことがある学生の中には、小学校の同級生であったり、自身のアルバイト先でたずねられたりという回答であり、いずれも筆談での会話であり、手話を学ぶことにおいては初めての学生ばかりだということがわかった。⑶「手話」の勉強をし

てよかったと思うことはあるかどうかの問については、そう思うと回答した学生 31 名、そう思わないと回答した学生１名、どちらでもないと回答した学生１名であった。内容については、「『ありがとう』『お大事に』など病院で勤務した時に役立つと思う」や「聴覚障害についての理解が深まる」、「もともと手話に興味があって学んでみたいと思っていた」などが見られ⑷「手話」に魅力を感じるかどうかの問については、魅力的であると回答した学生 23 名、魅力的でないと回答した学生７名、どちらともいえないと回答した学生３名であり、10 名の学生には手話の魅力がまだ伝わっていないことが明らかであった。今後の授業内容の検討などにより、手話の魅力が伝わるよう努力を重ねたい。なお、⑷においての魅力的であると回答した 23 名はいずれも、⑶において手話を勉強してよかったと回答していることも判った。魅力を感じる理由としては「耳が聴こえない人とでも会話ができるから」「手話が出来るようになると人間関係も幅広くなると思う」といった交友関係についての広がりに関する回答や、「一つひとつの言葉に手話の動作があって面白い」「表情が豊かになる」といった手話の技術や手話を話す時の注意点などが挙げられていた。⑸「手話」の学習が好きかどうかの問については、非常に好きと回答した学生４名、どちらかというと好きと回答した学生 12 名、どちらでもないと回答した学生 16 名、どちらかというと嫌いと回答した学生１名であった。必修科目であるため、好みに関わらず受講せねばならない。好きと回答した以外の学生については、今後は授業内容に工夫を加えて慎重に授業運営しなければならないことを把握した。⑹「手話」の授業に取り組む姿勢や態度の問については、非常に積極的であると回答した学生２名、どちらかというと積極的であると回答した学生 14 名、どちらでもないと回答した学生 14 名、どちらかというと消極的と回答した学生２名、非常に消極的と回答した学生１名であった。積極的と回答した学生の理由として、「楽しい」「奥深くてもっと知りたいと思う」「これから役立つ」等が見られた。医療事務養成校においての「手話」の必要性については確かに疑問点がある。しかしながら医療現場において、聴覚障害の患者が通院した際に、手話での「どうされましたか」や「お大事に」のその一言で、心が安らぐこともあるだろう。そのためにも手話という言語を習得し様々な患者に対応できるようカリキュラムとして位置づけられていると解釈している。けれども、学生にとって手話は一方的に見ていた言語であり、すぐに身につく技術でもないため、現在の学生には理解しがたい面があるのかもしれない。その裏付けとして、消極的と回答した学生の理由には、「身近なものとは思えない」や「周囲にそういう人がいないのでイメージがつかない」等が見られた。せっかくの機会であるため、授業においてそうした必要性も加えて説明をしながら、卒業後の就職先での自身の強みとなるようにサポートしていきたい。⑺「手話」の勉強をして分かったことの問については、あると回答した学生 31 名、ないと回答した学生２名であった。あると回答した中には、「手話は難しい」と記述した学生が６名、「手話は意外と難しくない」と記述した学生が４名と感じ方が異なっていた。また、「そのままで解かる手話が多い」「そのものの状態

を表しているものが多いと思った」などの、様子や状態、形状を手や指で示し伝えることを理解し学習している学生が５名いた。さらに、「手の動きだけでなく、表情など含めて成り立っていることが分かりました」「普段の会話より相手の話を相手の口の動きや手話を見て理解しようとしている」と記述し、手話は、手や指だけでなく表情なども含めて身体全体を使って伝達する言語であると理解できていることが４名の回答から見て取れた。これらから、授業内での説明において、魅力を伝えきれていないかもしれないが、理解しようと努力している学生の姿を見受けることができた。⑻「聴覚障害者の生活」について分かったことの問については、あると回答した学生 30 名、ないと回答した学生３名であった。あると回答した中には、「音が聞こえないので後ろから車が来た時に危ないと思った」等の記述した学生は４名おり、聞こえないことからくる不自由さや不便さが見られた。一方で、「インターホンは聴こえないので光で伝えていること」「トイレのノックを電気でカチカチさせて気付かせていること」等の合図を音ではなく光により伝えられていることを理解している学生が８名、「普通に生活ができること」等も２名挙げていた。少数の記述ではあるが、「（他の障害と比べて）耳が聞こえると思われて話されることが多いこと」等は、視覚障害（であれば白杖や盲導犬と共にしていること）や車椅子であれば見て判断ができるが、聴覚障害の場合、補聴器を使用しているか手話で会話をしていなければ、周囲の人はそのように判断しないため､そのことが理解できたという記述であった。これらは、DVD 視聴や教科書のコラム等で取り上げた話題が印象に残っているものと思われる。そうした点では、インパクトのある内容や学生がなるほどと感じる事柄を中心に、手話だけでなく、聴覚障害者の生活なども含めて説明する必要性を感じた。⑼知っている手話の中で一番印象に残っている手話の問については、８名が「ありがとう（ございます)」、４名が「よろしく（お願いします)」と記述していた。これは、授業開始時と終了時には「よ

表1　問10の回答結果

	非常に良い	どちらかというと良い	どちらともいえない	どちらかというと悪い	非常に悪い	無回答
① ペア学習で伝達し合う	7	15	9	1	0	1
② 最近の出来事をペア学習で伝達し合う	5	15	12	0	0	1
③ 聴覚障害者の暮らしについてのDVD視聴	17	9	6	0	0	1
④ 手話歌の表現	9	13	8	0	0	3
⑤ ５W１Hの手話表現とその回答	10	16	6	0	0	1
⑥ 実習に向けての手話練習	12	13	2	2	0	4

ろしくお願いいたします」「ありがとうございました」という挨拶を交わすため、好みとは関係なく印象に残るものと思われる。このようにして、毎回使用する言葉があれば、それらが手話の技術として身につくものと思われ、まさに言語の学習であると身をもって体験した。⑽これまでの授業項目についての評価の回答については表１の通りであり、やはりDVD視聴で得られた情報が多いことが見て取れる。次いで、5W1Hを使用した手話表現とその回答、実習に向けての手話表現等が挙げられていた。受講生にとって、インパクトのある情報や、実習先や就職先で直接的に結びつくものに関して評価が高いことがわかった。

３．ボランティア志向性と向社会的行動尺度調査

（１）方　法

前調査と同じ受講者を対象に、同方法で2017年10月に質問紙調査を実施した。質問紙調査内容についてはフェイスシートと２種類の質問紙からなり、回答方法については次に示す通りとした。１つ目は本橋ら（2003）が自らの研究のために作成した、ボランティア質問項目を使用した全20項目の質問に対して、自分の考えを「きわめてあてはまる」から「あてはまらない」までの５件法で回答してもらった（図１－１）。なお、本橋らによる元の尺度名は「ボランティア質問項目」であるが、その内容から本研究においては「ボランティア志向性尺度」と命名して用いることにした。２つ目は菊池（1988）による向社会的行動尺度（大学生版）20問で、回答方法は「いつもした」から「したことがない」までの５件法とした（図１－２）。

【1】
次の項目についてあなたはこれまでどの程度あてはまりますか。
自分にあてはまる程度(1～5)に○をつけてください。

	あてはまらない	少しあてはまる	わりとあてはまる	かなりあてはまる	きわめてあてはまる
（１）自分でイベントを企画することはやりがいがあると思う	1	2	3	4	5
（２）他人にゲームのルールを説明したりするのは好きだ	1	2	3	4	5
（３）自分の感じていることをみんなにわかるように説明するのが得意だ	1	2	3	4	5
（４）ボランティア活動は多くの内容があることを知っている	1	2	3	4	5
（５）誰もしゃべらないときは自分から話題を提供できる	1	2	3	4	5
（６）初めてあった相手でもうまく話をあわせることができる	1	2	3	4	5
（７）世界の子どもたちがどんな状況か考えることがよくある	1	2	3	4	5
（８）小さな子どもにやさしい言葉を使って説明するのが得意だ	1	2	3	4	5
（９）みんなの意見をまとめ行動や企画の決定ができる	1	2	3	4	5
（10）ボランティア活動をする人たちは生き生きしているとよく感じる	1	2	3	4	5
（11）人と協力して物事を行うことが好きである	1	2	3	4	5
（12）自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	1	2	3	4	5
（13）他の国で起きていることは自分にも関係があると感じることが多い	1	2	3	4	5
（14）みんなの前で自分の意見をはっきり言うことができる	1	2	3	4	5
（15）ボランティア活動を取り巻く課題について知っている	1	2	3	4	5
（16）自身の将来像について考えたことがある	1	2	3	4	5
（17）ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	1	2	3	4	5
（18）自然を維持したり回復することは難しいことだと思う	1	2	3	4	5
（19）いろいろな人たちが一所懸命にボランティア活動をしていることをよく見る	1	2	3	4	5
（20）自分とは違う考えの人の意見を聞くことができる	1	2	3	4	5

図１－１　ボランティア志向性尺度（本橋ら，2003による）

【2】
次に挙げている様々な行動を、あなたはこれまでどの程度したことがありますか。
自分にあてはまる程度(1～5)に○をつけてください。

	したことがない	一度したことがある	数回したことがある	しばしばした	いつもした
（１）列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる	1	2	3	4	5
（２）お店で、渡されたおつりが多かった時、注意してあげる	1	2	3	4	5
（３）ころんだ子どもを起こしてやる	1	2	3	4	5
（４）あまり親しくない友人にも自身のものを貸す	1	2	3	4	5
（５）気持ちの悪くなった友人を、介抱する	1	2	3	4	5
（６）友人の困っていることを手伝う	1	2	3	4	5
（７）列車などで相席になったお年寄の話し相手になる	1	2	3	4	5
（８）気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を出したりする	1	2	3	4	5
（９）何か探している人には、こちらから声をかける	1	2	3	4	5
（10）バスや列車で、立っている人に席をゆずる	1	2	3	4	5
（11）酒に酔った友人などの世話をする	1	2	3	4	5
（12）雨降りのとき、あまり親しくない友人でも傘に入れてやる	1	2	3	4	5
（13）欠勤や欠席した人のために、状況を教えたり世話をしたりする	1	2	3	4	5
（14）家族の誕生日などに、家に電話したりプレゼントしたりする	1	2	3	4	5
（15）見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる	1	2	3	4	5
（16）知らない人に頼まれて、カメラのシャッター押しをしてやる	1	2	3	4	5
（17）バスや列車で、他人の荷物を網棚にのせてあげる	1	2	3	4	5
（18）知らない人が落として散らばった荷物を、一緒に集めてあげる	1	2	3	4	5
（19）ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする	1	2	3	4	5
（20）自動販売機や切符券売機などの使い方を知らない人に教えてあげる	1	2	3	4	5

図１－２　向社会的行動尺度（菊池，1988による）

（２）結果と考察

33 名の回答結果から、各尺度の平均値を表２－１、表２－２に示す。ボランティア志向性尺度得点においては、問 7、15 のように直接自身に関係のない項目については他よりも低い得点が、問 11、16、17、20 のように自身や将来に関する項目については高い得点を表していた。

表2－1 ボランティア志向性尺度得点平均値

（1）	（2）	（3）	（4）	（5）	（6）	（7）	（8）	（9）	（10）	（11）	（12）	（13）	（14）	（15）	（16）	（17）	（18）	（19）	（20）
2.79	2.15	2.15	2.55	2.79	2.76	1.91	2.76	2.36	3.15	3.33	2.36	2.18	2.58	1.73	3.52	3.39	3.18	2.85	3.58

表2－2 向社会的行動尺度尺度得点平均値

（1）	（2）	（3）	（4）	（5）	（6）	（7）	（8）	（9）	（10）	（11）	（12）	（13）	（14）	（15）	（16）	（17）	（18）	（19）	（20）
2.58	2.48	2.56	3.33	3.55	3.97	2.52	3.58	2.48	3.09	2.85	2.52	3.24	4.22	3.42	4.00	1.36	2.97	1.88	2.09

向社会的行動尺度得点においても自身の関係する項目については高い得点を示していたことが見て取れた。質問紙調査で用いたボランティア志向性尺度と向社会的行動尺度の間には正の相関（r=.59 , p < .001）を示していたことも踏まえて、質問項目の下位項目について平均差を検定した。各向社会的行動尺度得点の平均値から中央値(2.80)を、ボランティア志向性尺度得点の平均値から中央値（2.65）を算出し、それぞれの中央値よりも高い得点は高群、低い得点は低群として分析した。ボランティア志向性尺度からは表３－１に示す５項目に、向社会的行動尺度からは表３－２に示す 13 項目に有意差が見られた。ボランティア志向性については、向社会的行動が高い方が人と関わることや説明すること等、卒業後に必要となる能力に有意な差があることが分かった。また、向社会的行動については、前述の平均値において低い値であった問 17、19 の項目に有意差が見られたことから、ボランティア志向を上げることにより、より向社会的行動が高められるのではないかと思われた。

表３－１　ボランティア志向性尺度の向社会的行動尺度群別平均値と t 検定結果

	質問項目	向社会的行動尺度低群 平均値	向社会的行動尺度低群 標準偏差	向社会的行動尺度高群 平均値	向社会的行動尺度高群 標準偏差	t 値	
（1）	自分でイベントを企画することはやりがいがあると思う	2.29	1.312	3.31	1.401	2.16	*
（3）	自分の感じていることをみんなにわかるように説明するのが得意だ	1.82	.809	2.50	.966	2.19	*
（8）	小さな子どもにやさしい言葉を使って説明するのが得意だ	2.35	.862	3.19	1.223	2.28	*
（9）	みんなの意見をまとめ行動や企画の決定ができる	2.00	.791	2.75	1.183	2.13	*
(12)	自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	1.82	.883	2.94	.854	3.68	**

*p < .05 , **p < .01

表３－２　向社会的行動尺度のボランティア志向性尺度群別平均値と t 検定結果

	質問項目	ボランティア志向性尺度低群 平均値	ボランティア志向性尺度低群 標準偏差	ボランティア志向性尺度高群 平均値	ボランティア志向性尺度高群 標準偏差	t 値	
（３）	ころんだ子どもを起こしてやる	2.13	1.147	3.00	1.211	2.10	*
（４）	あまり親しくない友人にも自身のものを貸す	2.94	.966	3.75	1.291	2.05	*
（５）	気持ちの悪くなった友人を、介抱する	3.00	.935	4.13	.885	3.54	**
（６）	友人の困っていることを手伝う	3.59	.795	4.40	.632	3.17	**
（７）	列車などで相席になったお年寄の話し相手になる	1.76	.831	3.31	1.138	4.48	***
（８）	気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を出したりする	3.12	.928	4.06	.998	2.82	**
（９）	何か探している人には、こちらから声をかける	2.00	1.061	3.00	1.095	2.66	*
(10)	バスや列車で、立っている人に席をゆずる	2.56	.964	3.63	.957	3.13	**
(12)	雨降りのとき、あまり親しくない友人でも傘に入れてやる	1.94	1.029	3.13	1.360	2.83	**
(13)	欠勤や欠席した人のために、状況を教えたり世話をしたりする	3.06	.748	3.44	1.209	1.07	*
(16)	知らない人に頼まれて、カメラのシャッター押しをしてやる	3.53	1.125	4.40	.828	2.82	**
(17)	バスや列車で、他人の荷物を網棚にのせてあげる	1.18	.529	4.50	.816	1.28	*
(19)	ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする	1.41	.870	2.38	1.544	2.19	**

$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$

４．まとめ

本研究では、医療事務や医療秘書を養成する専門学校における必修科目「手話」に関する学生の意識と学習に対する姿勢について、質問紙調査により実態把握をするとともに、今後の授業計画の手がかりを得るものとした。対象者はこれまで手話を使用したことがなく、身近なものではなかったが、「一つひとつの言葉に手話の動作があって面白い」「表情が豊かになる」といった手話の技術面や話す時の注意点などの感想から、学習したことによって知識が得られていたことや、「インターホンは聴こえないので光で伝えていること」「トイレのノックを電気でカチカチさせて気付かせていること」等の合図を光により伝えられていることを理解してきたこと等、言語としての手話だけでなく聴覚障害者の生活や文化を知る手立てとなった。しかしながら、手話の難しさや「身近なものとは思えない」、「周囲にそういう人がいないのでイメージがつかない」といった消極的な意見も聞かれたことから、今後の授業計画に反映させることのできるよいきっかけとなった。また、ボランティア志向性や向社会的行動などの意識を高めることで、さらに今後の学習によい影響があるのではないかと思われた。

【引用文献】

阿部忍（2010）「手話通訳者の医療機関における手話通訳に関する研究」障害理解研究第12巻，pp.27-37

井手祐太・菅千索（2015）「家族関係が子どもの向社会的行動に及ぼす影響について」和歌山大学教育学部紀要教育科学第65巻，pp.71-76

伊東美鈴・渡辺裕一（2008）「大学生のボランティア活動支援における現状と今後の課題」健康科学大学紀要第4巻，pp.43-55

亀井伸孝（2014）「愛知県立大学における手話教育に関する学生意識調査報告－　『語学として手話を学びたい』という期待に応える教育の提言－」愛知県立大学高等言語教育研究所年報第6巻，pp.27-38

増谷梓・阿部ゆかり・手塚清貴・田中瑞穂・鹿内信善（2017）「聾学校小学部での看図作文の実践－日本手話を活用した日本語指導－」福岡女学院大学紀要人間関係学部編，18，pp.99-109

村瀬忍・鈴木祥隆（2016）「大学生の手話学習への関心についての調査」岐阜大学教育学部研究報告人文科学，第64巻第2号，pp.99-102

谷田（松﨑）勇人（2015）「大学生の地域社会への責任尺度の作成」日本教育工学会論文誌第39巻第1号 , pp. 31-40

山本雅代（2011）「手話はいかに捉えられているか－大学生を対象とした調査から－」言語と文化第14巻，pp.29-42